

「史料に見るタイ文化圏の樹木利用」－絹、茶、酒やビンロウなど－

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

クリスチャン・ダニエルス

(第 25 回雲南懇話会発表、2013 年 6 月 22 日)

1. 史料（一次資料）が提供する情報

- ・ 史料（第一資料）：文献、碑文、考古学出土物、遺物を含む。
- ・ 史料は植物が確実に使用された年代の証拠を提供。時代ごとに変遷が明確にできる。
- ・ 植物がどのように使用されたか、その用途についてデータが得られる。
- ・ 史料利用の限界：史料は植物利用の有無を明示するのみ。使用開始の最古年代の証拠にならない。また、DNA や molecular sequencing などの技術による植物系譜を再構築できるデータを提供しない。

2. 中国史料

一. 13 世紀以前の書物

- ・ 嵇含『南方草木状』（304 年成書）
- ・ 常璩撰『華陽國志』（4 世紀中頃に成立）
- ・ 樊綽著『蠻書』（860～874 年成書） 著者は 863 年に雲南を訪問した。
- ・ 欧陽修、宋祁など奉勅撰『新唐書』（1060 年成立）

二. 14 世紀～16 世紀の書物

- ・ 李京編撰『雲南志略』（1303～4 年成書） 著者は雲南を訪問した。
- ・ 錢古訓・李思總撰『百夷傳』（1396 年 緬國とムン・マーウ国（百夷）に派遣された明王朝の使者の記録） 著者は 1396 年に百夷と緬國を訪問した。
- ・ 著者不詳『西南風土記』（1583～4 年） タウンギー朝のナンダバイン王を討伐するアヴァまで進軍した明王朝の軍に同行した者によって執筆された。
- ・ 地方誌：例：劉文徵撰『滇志』（1620 年代成書） 著者は雲南を訪問した。

3. 東南大陸部アジアの大きな王朝

- ・ パガン朝（1044～1364）（ビルマ族）
- ・ クメール帝国の首都は 9 世紀から 15 世紀中ごろまでアンコール（クメール族）
- ・ 1340～1380 年の間にはこの二つの王朝は崩壊・衰退した。
- ・ タイ系民族の勃興が原因の一つ
- ・ タイで 1351 年にアユタヤ朝成立（Thai）
- ・ ミャンマーで 1364 年パガン朝が崩壊してからアヴァ（インワ）朝(1364～1555)が成立

4. 史料利用の限界を示す事例：穀物

- ・ イネは画像磚によって確認できる。3・4 世紀において陶製水田模型の出土によって 20 世紀まで使用されてきた耕作法の存在が確認できる。耕（犁）一耙一耖
- ・ 成都市出土戈射・収獲画像磚。上部は陂塘でイグルミを用いてカモを射る様子、下部は水稻を収獲する様子。

- ・現在、東南アジア大陸部北部で栽培される穀類はイネ、アワ、ハトムギ、シコクビエ、モロコシ、キビ、トウモロコシの7種類である。

ピュー（約3世紀～10世紀）の経済基盤

『新唐書』（1060年成立）列傳第147南蠻下によれば、ピューの乾燥地帯の土地は「菽^{しゆく}[豆]、粟、稻、^{りょう}梁、蔗大若脛」を産し、「麻と麦は無い」と明記する。（中華書局本）
 水稻作と畑作があった傍証になる

- ・『百夷傳』（1396年）で確認できる穀類は苦ソバだけである。

5. 絹織物の事例

- ・タイのシルクやラオスのシルクは有名
- ・ミャンマーは絹織物の消費地であったが、生産地ではなかった。
- ・19世紀において、生糸や絹織物が中国から輸入されていた。
- ・綿花輸出・中国生糸の輸入
- ・マダレーでは機織り職人が中国生糸を用いて布を織りだしていた。
- ・東南アジア大陸部は綿が中心であった。

6. 絹文化には二系統がある。

- ・ **中国系統**：桑を食するカイコを使用してマルベリーシルクを生産する。これは人為的な管理が不可欠なカイコ科のカイコ（*Bombyx mori*）の繭を利用する養蚕である
 養蚕の起源は5000–6000年前の中国揚子江中・下流域であると推定される
- ・ **インド・ヒマラヤ、アッサム山地系統**：桑を利用しないノン・マルベリーシルクを生産する。これはヤママユガ科のカイコのように野生のものを使用する。
- ・ 中国系統の養蚕と絹織物生産は、遅くとも10世紀までにはインドネシアのマタラム王朝で行われていた。

7. 大陸部では中国系統の養蚕と絹織物生産はいつから開始したのか

- ・ 雲南ではカイコの繭から糸をひいて絹を作る歴史は古いが、10世紀以前雲南の南に位置する東南アジア大陸部では養蚕が行われていなかったとの記録がある。

『華陽國志』（4世紀中頃）によれば、永昌郡ではカイコ、桑及び絹があった。だが、『蠻書』雲南管内物産第七には「銀生城[現在の景東県]、拓南城、尋傳、祁鮮[イラワジ河一帯]以西、藩蠻の種は決して蠶^{カイコ}を養わない。」とある。

- ・ 周達観著『真臘風土記』によれば、13世紀カンボジアでは、スコータイから移住した暹人が桑の種とカイコの卵を将来して養蚕していた。

8. タイ系民族の絹織物生産

- ・ 李京編撰『雲南志略』（1303～4年）によれば、金齒百夷は「桑(そう)柘(しゃ)が多く、四季を通じて養蚕する」とある。
- ・ 『殊域周咨録』（1583年）によれば、干崖宣撫司では「領内は甚だ暑く、四季を通じて養蚕をし、絹糸を五色に染めて土錦を織り上げ、[これを]貢物に充てる。」
- ・ 劉文徵撰『滇志』（1620年代）によれば、タイ系民族地域では絹織物が多く、永昌府では「伯夷紗」、楚雄府では「百夷錦」、元江府では「土錦」が織られていた。
- ・ タイ系民族が広域にわたり絹織物生産者であった。
- ・ タイ（シャン）語では桑が ton. may. mön: という。

9. カンボジアへの養蚕・絹織物技術移転

クメール帝国の首都は9世紀から15世紀中ごろまでアンコールにあった。

- ・ 周達観は元王朝からカンボジア（真臘国）に派遣された使節に随員として、元貞二（1296）年7月にその首都ヤショーダラプラ（現アンコール・トム）に到着して、大徳元（1297）年6月まで滞在した。
- ・ 周達観『真臘風土記』（14世紀初頭執筆された）「蚕桑（養蚕）」の記事がある。
- ・ クメールの女性は裁縫ができず、機織り機を用いず、木綿の布を織るだけであった。
「土地の人はみ蚕桑を行わない。婦人は針線[縫い針と縫い糸]、縫補[裁縫]のことを詳しく知らない。僅かに木綿布を織ることができるだけである。また、紡ぐことができないで、ただ手で[繊維を]とり集めて條[糸]につくる。機杼（機織り機）」がなく織るのに、ただ[糸の]一端を腰に縛り、[他の]一端を窓の上にかけて[織り]、梭（はたのひ）はただ一個の竹管を用いるだけである。」和田久徳訳注（平凡社、東洋文庫、1989年）68頁
- ・ 腰機？

10. タイ系民族による養蚕・絹織物技術移転

- ・ 周達観『真臘風土記』「蚕桑（養蚕）」の記事に下記のようにある。
「近年、暹人が来て居住して、そこで蚕桑を仕事として、桑の種・桑の種はみな暹[スコータイ]の中から来た。[カンボジアには]麻・苧（からむし）がなく、ただ絡麻（きあさ）があるだけである。これと違って、暹人は絹糸を用いて自ら黒い綾衣（模様のある絹織物）を織って着用する。暹の婦人は[カンボジア婦人と]反対に縫補ができる。土地の人はまとった布が損じ破れると、皆暹の婦人を雇ってこれを補修させる。」和田久徳訳注（平凡社、東洋文庫、1989年）69頁
- ・ 13世紀末、スコータイ（現在のタイ中部）から移住してきたタイ系民族（暹人）がカンボジアに桑の種とカイコの卵を将来して養蚕を行って生計を立てていた。
- ・ カンボジアでは暹人が絹織物を織って着用していた。
- ・ 暹人の婦人がカンボジア人に裁縫のサービスを提供していた。
- ・ 東南アジア大陸部ではタイ系民族がマルベリーシルク系統の技術を利用していた。

11. 1396年に披露された宴会の茶、ビンロウおよび酒

- ・ 『百夷傳』（1396年）下記のように記録する。
「先に沽茶、萹葉及び檳榔を以てこれを啖む。次に飯を具え、次に酒饌を進め、俱に冷たいものを用いて熱いものは無し。…」(p. 71~74) 酒饌=酒と食物
- ・ 噛み茶は宴会で食前にビンロウとともに供されるが、同じ位置づけなのか

12. 『百夷傳』にみられる噛み茶（neng³ yam⁴）の製法

- ・ 『百夷傳』（1396年）は沽茶、『西南風土記』（1583~4年）は谷茶と漢字表記する。
- ・ 製造法は下記の通りである。
「春夏の間に、山中の茶葉を採集して煮た後、竹筒の中につめこみ竹の皮でとじる。一、二年たつと、味は極めて美味になるが、煎じて飲むことはできない。」 『百夷傳校注』71頁。
- ・ 土の中に埋めるかどうかについては記述がない。これは茶葉を蒸して大きな穴の中につけこむ現在のタイ北部の大量生産より古い手法である。大量生産との関係

13. 飲む茶

- ・ 『百夷傳』には飲む茶の記事が見えない。しかし、茶を引用する習慣は雲南で確認できる。『蠻書』雲

南管内物産第七には「茶は銀生城[現在の景東県]界の諸山で生産され、散収しても造法を採ることは無い。蒙舎[現在の巍山]蠻は^{しょう}椒、^{にくけい}薑、^{わほう}桂を以て和烹してこれを飲む。」とある。

- ・ 14 世紀ではタイ系民族がまだ茶を飲んでいなかった？
- ・ 嗜み茶と飲む茶の地域の境界はタイ系民族地区がであった可能性がある。

14. 茶に関する言語データによる G.H. Luce の仮説

- ・ 本来、茶を意味する漢字は茗である。
- ・ 茗は現在 **ming** 古代の発音 **mi^weng**
- ・ 茗は下記の北方モン・クメール語からの借用語である
- ・ **myām** (Palaung), **myem** (Rumai), **myem/mem** (Riang), **mi:n**(Danaw)
- ・ ロロ、リスやビルマなど初期のチベット・ビルマ諸語の話者は **la[?]** を使用した
- ・ **la[?]** は「葉」を意味するオーストロアジア語の単語。
- ・ **la[?]p'a[?] (le[?]p'e[?])** p'ak は経済価値のある葉を意味する
- ・ 上記の仮説は古代におけるモン・クメールの分布に基づいている
- ・ 史料による裏付けはない

G.H. Luce, *Phases of Pre-Pagan Burma Languages and History* Volume 1, Oxford University Press, 1985, p. 16

15. 粒酒は『百夷傳』(1396 年) に記録されている。(74 頁)

「酒は杯あるいはストロー（筒）を用いる。ストローは蕨楷(けつのくき)や鵝翎(がちょうのはね) の管を連結してつくる。各ストローの長さは三メートル以上にもなり、漆を塗り、さらに金を施している。ひとたび酒をかもせば、甕に水を入れて満たせば、その中にストローを差し込む。甕に目印をつけて杯の数を記し、人々は順番にストローを持ち上げてこれを口+匝（す）う。酒を杯一杯分口+匝（す）ったら、甕に水一杯分を加えて次の客にストローを渡す。酒の味は非常によいが、味が薄くなったら水を加えるのをやめる。俗に口+匝酒（そうしゅ）と称す。」

- ・ 正式の宴会での飲み方の描写、漆のストローの使用が確認
- ・ 現在山地民に残る嗜み茶、ビンロウおよび粒酒の消費は、14 世紀において統治者であったタイ系民族によって使用されていた。

16. サトウヤシ（桃榔）発酵酒—ヤシ酒

- ・ タイ語では ton. thaan という
- ・ 『南方草木状』(304 年成書)によれば、サトウヤシの用途は
- ・ サトウヤシの皮で縄をなう。船舶の建造に利用する。皮が水の中で柔軟で強くなるからである。
- ・ 幹に含まれるデンプンが食用できる。
- ・ 木材は碁盤として用いる。
- ・ タイ・ビルマでは **Arenga pinnata** 以外には、*Borassus flabellifer* が利用されていたと思われる。

17. サトウヤシの栽培分布

- ・ ミャンマーとアッサム州では野生だが、ミャンマーとタイでは植林されている(Watt 1908)
- ・ 『南方草木状』によれば、交趾と九真に分布する。
- ・ 樊綽の『蠻書』(864 年成書)巻七 (191 頁)には、「荔枝、檳榔、訶黎勒(かりろく)、椰子、桃榔等の諸樹は、みな永昌[保山]、麗水[イラワジ川]、長傍[角拖]、金山[不明]にある。」とある。

18. サトウヤシの象徴的な意味

- ・ ラームカムヘン王碑文には以下のようにある。"In 1214 saka, a year of the dragon [1292 A.D.], the Lord Ram Khamhaeng, chief of the state of Sisachanalai and Sukothai, who had planted these sugar palm trees fourteen years before, commanded his craftsmen to carve a slab of stone and place it in the midst of these sugar-palm trees. On the day of the new moon, the eighth day of the waxing moon, the day of the full moon, and the eighth day of the waning moon [one of] the monks, *theras* or *mahatheras* goes up to and sits on the stone slab to preach the *dhamma* to the throng of lay-people who observe the precepts. When it is not a day for preaching the *dhamma*, Lord Ram Khamhaeng, chief of the state of Sisachanalai and Sukhothai, goes up, sits on the stone slab, and lets the officials, lords and nobles discuss affairs of state with him. (Terwiel 2010, pp. 86~88)

19. サトウヤシの象徴的な意味

- ・ 13世紀末シヤムでは植林がある。(Terwiel 2010 p.78.)
- ・ サトウヤシの社会的意義：ラームカムヘン王は、サトウヤシの植林の中に位の高い僧侶が座って説法できる石の平板を置き、王もその上に座り、官僚と貴族とともに国事を討論した。宗教・政治的活動が砂糖椰子の植林で行われた。砂糖椰子には特別な意味があった可能性がある。

20. ヤシ酒の製法

- ・ 製法は簡単で、サトウヤシの汁液は自然の酵母を含んでいるため、穀物醸造のように麴を別に用意する必要がない。採集した汁液をそのまま放置すれば、半日で自然に発酵して酒になる。
- ・ 『百夷傳』（1396年）は緬人による製法を記録している。「その地には、棕のような形をした樹木がある。樹の杪に筍(たけのこ)状のものが八、九茎ついている。人は刀(なた)でその先端を切り、上に瓢(ひさご)を縛り、一夜で瓢一個分の酒ができる。それは香ばしく且つ甘く、飲めば必ず酔う。その酒は夜を経れば、必ず酸味を帯びる。精製して焼酒を作り、酒に強い人は盞(さかずき)一杯は飲める。」

21. サトウヤシの汁液で砂糖製造

- ・ サトウヤシの汁液は糖分が多く、東南アジアではこれを加熱して砂糖をつくることが多い。『西南風土記』（1583~4年）には、もし樹液が多く採取できて、「飲み尽くせなければ、煎じてもって飴をつくる。蔗糖に比べて尤も佳(か)なり」とあり、巖從簡の撰による『殊域周咨録』（1583年）は「樹液を煮詰めて白糖をつくることもある」と記す。サトウヤシの樹液は黒糖と白糖の原料としても使用されていた。

22. ムン・ミットは穀物酒とヤシ酒の境界

- ・ ムン・ミット辺りは蔗糖とヤシ糖の境界である。
- ・ 麴発酵の穀物酒（粒酒）は照葉樹林で誕生した。(中尾・佐々木(1992年))
- ・ ヤシ酒は東南アジアあるいはインドで独自発生した仮説がある。
- ・ 『西南風土記』（1583~4年）は、「ムン・ミットより下、食するところすべて樹酒なり」と明記して、ムン・ミット以南ではヤシ酒の消費が多いことを伝えている。

23. ビンロウ (*Arenga catechu* L.) の英文学名

- ・ *A.cathecu* L.の果実をキンマ (*Piper betle*) の葉に包み、石灰と一緒に咀嚼する。
- ・ ヤシ科植物の葉とコショウ植物の実の胚乳部分を合わせて使用する仕組み。

- ・ 英語では : *A. cathecu* L. はしばしば betel nut palm というが、実はキンマ (betel) の果実ではなく、areca nut が使用される。areca palm
- ・ betel quid= areca nut, betel leaf 及び slaked lime.

24. ビンロウは嗜好品としての歴史が古い

- ・ ビンロウ咀嚼の習慣は、南アジア・東南アジア・華南を中心に、東は太平洋の一部、西はマダガスカル・東アフリカ海岸まで及ぶ。1200~1400 ごろ、ザンジバル海岸にあった。Reichart & Philipsen (1996) p. 13.
- ・ ヨーロッパ人によるビンロウの果実の最初の植物図解は Carolus Clusius (1567), p.119.
- ・ 4 世紀初めの『南方草木状』ではインドシナ半島にあったチャンパ (林邑) では、来客・親戚をもてなす果実として珍重された。
- ・ 14 世紀初め李京の『雲南志略』には、金齒百夷が果実を、キンマの葉にくるみ、石灰と一緒に咀嚼する記述がある。
- ・ ラームカムヘン王碑文 によれば、1292 年のスコータ には、ヤシ科の植林が盛んであった。”They plant areca groves and betel groves all over the country. Coconut plantations are manifold in this country, and jackfruit plantations are manifold in this country. Mango plantations are manifold in this country. Tamarind plantations are manifold in this country. Anyone who plants them gets them for himself.” Terwiel (2010) 78 頁
- ・ 14 世紀初め李京の『雲南志略』には金齒百夷が「檳榔、蛤(こう)灰(はい)、芙蓉留(ふくりゅう)葉(よう)をもって賓客に奉げる。」果実を、キンマ (Piper betle) の葉にくるみ、石灰と一緒に咀嚼する記述がある。ヤシ科植物の葉とコショウ植物の実の胚乳部分を合わせて使用する点が初めて記録される。
- ・ 劉文徴撰『滇志』(1620 年代)によれば、紅河沿いに居住するタイ族系民族は、ビンロウを大量に栽培している。「この地は檳榔を生産しており、その植えかたは中国の桑栽培に似ているが、花が咲くころ、犬を殺して血をそそぎ、樹を汚すことによって、樹は実をつける。商人がそれを運び出して非常に大きな利益を得るため、大勢の人間が群がる。」

25. 果実の収穫に関する儀礼

- ・ 『滇志』はその儀礼の目的について、
「紫檳榔が実をつけるころ、ビンロウ園を封鎖して犬の血をもってその樹を汚す。土地の人がいうには、このようにしなければ、仙人に実を採られて樹は空になってしまう。商人がそれを運び出して、雲南全域の用に供するが、それは全省にとって実に巨額な無益の浪費である。」
- ・ 「犬の血をもってその樹を汚せば」、仙人は好きなビンロウの実に手を出さないということが述べられている。これはビンロウ栽培の最も重要な時期に、結実に災難がふりかからないようにするための儀礼であり、避邪の機能を果たす。
- ・ ビンロウの商品化が進行すると儀礼が消えていく？

26. 果実の用途：咀嚼

- ・ 嗜好品：容器 (赤い汁を吐き出すためなど)
- ・ 結婚式・農耕儀礼における役割
- ・ 効果：虫歯・歯周病予防

27. 棕櫚 (Trachycarpus)

28. 気候変更とタイ系民族の勃興

- ・パガンとアンコールは中世の異常天候（950~1250/1300 CE）の間に成立・隆盛した
- ・中世の異常天候とは、La Niña によって海水面の温度が低くなったことによって、東南アジア、インド、華南でモンスーンが比較的穏やかで、雨季の期間が長くなり、乾季が短くなった。天水稲作と二期作に適していた。
- ・パガンとアンコールは、中世の異常天候がなくなった後の 1340~1380 に崩壊する。これは小氷河期という時期に当たるが、この小氷河期の到来が 1400 年までにアンコールの水利システムを破壊した原因の一つとなっていた。

29. 小氷河期とは

- ・小氷河期：El Niño によって海水面の温度が高くなったことによって、東南アジア、インド、華南でモンスーンの期間が短縮され、集中豪雨が多く、激しくなった。雨季が短くなり、乾季が長くなり、農業にとって干ばつ（天水不足）が問題となる。
- ・小氷河期によってアンコールの水利システムが弱体化した。また天水不足がチェンマイやタイ東北のタイ族の政権の成長を妨げた。この気候的条件は、1351 年のアユタヤ朝成立とその後の勢力拡大を助長した。

30. 中世異常天候説 の根拠

- ・Victor Lieberman & Brendon Buckley, “The Impact of Climate on Southeast Asia circ 950-1820: New Findings” *Modern Asian Studies* 46, 5 (2011) pp. 1049-1096
- ・過去の気候を推定するために、樹木の年輪測定を分析する方法がある。
- ・樹木の年輪測定から過去の降水量の変化が分かる。
- ・タイ王国の Maehongson のチークの年輪測定から、はっきりした雨季と乾季が 1558 年 CE まで遡る。
- ・ベトナム南部の高地の cypress trees (*Fokienia hodginsii*) の年輪測定からはっきりした雨季と乾季が 1030~2008 年 CE の 979 年にわたり分かる。

31. まとめ

- ・植物の利用方法が文献の初出より古く遡る。例えば、技術の単純さからすれば、ヤシ酒は 14 世紀と 16 世紀に初めて史料に記録するが、その製造開始はそれより早かったと考えられる。ビンロウも同じ。
- ・商品化に伴い、樹木の栽培に関する儀礼が減少していく（例：ビンロウ）。もともと樹木に神が宿るといふ信仰があったが、樹木の神聖を重んじなくなった現在の東南アジア大陸部では、その果実は結婚式や農耕儀礼の必需品として消費されている。
- ・神が樹木に宿るといふのが消滅すると、自然を破壊する心理的な束縛が薄くなる。（社会主義国では顕著である）
- ・1300 年ごろ以降、樹木利用の区域が確認でき、その境界も記録される。例えば、茶を飲用する地域と茶を嗜む地域の境界は雲南西南部にあり、また粒酒を飲用する地域とヤシ酒を飲用する地域や、タイ系民族のマルベリーシルクとアッサムのノン・マルベリーシルク地域などが区別できる。
- ・特定の民族集団に保有される加工技術・技能もある、例：絹織物
- ・華南の植物利用法（茶、粒酒、絹文化）がタイ系民族の居住地域の範囲まで及ぶ。
- ・東南アジア・南アジアの植物利用法（サトウヤシ、ビンロウ）が華南に重なる。